

—文化財めぐり—

# 伊王島の 近代化遺産を訪ねて

発行日：平成21年11月1日

発行所：長崎市魚の町5-1

長崎市文化財課

TEL 095-829-1193



市指定名勝 伊王島灯台公園

日時 平成21年11月1日(日) 9:30 ~ 15:30  
コース 長崎港ターミナル(集合) ~ 伊王島開発総合センター(講義) ~ 馬込教会 ~ 伊王島灯台公園 ~ 伊王島灯台旧吏員退息所 ~ 伊王島港ターミナル(解散)  
主催 長崎市文化財課  
講師 長崎大学工学部教授 岡林 隆敏氏、文化財課職員

## 近代化遺産とは

日本は幕末から明治時代にかけて欧米の近代科学技術に移植することにより、近代化を推し進め現在の技術立国の基礎をつくりました。日本の近代化は欧米の技術の導入期、産業革命を経て、第2次大戦期まで継続的に進められ、これらの基礎となった都市基盤、産業基盤、交通基盤などの構造物が残されています。

「近代化遺産」とは日本の近代化に貢献した産業、交通、土木にかかわる文化財を包括的に表す言葉です。「近代化遺産」は近代につくられたものの中で、主に工業、鉱業など生産と製造にかかわる産業施設、鉄道、道路、港湾などの土木施設を指し、構造物と一体となっている設備や機械なども含まれます。

- ①西洋建築物／洋館・ホテルなど
- ②産業構造物／造船、工場、鉄塔、醸造、農業構造物
- ③交通構造物／鉄道、電車、港、灯台、運河、橋梁、トンネル
- ④社会基盤設備／水道、下水、発電
- ⑤軍事施設／倉庫、砲台、工場など

### 近代化遺産について（文化財保護法）

平成8年2月に改正された「国宝及び重要文化財指定基準」の中にはじめて土木構造物という言葉が明記されました。多彩で大量な、また継続的な使用が求められることの多い近代の建造物の保護を目的とした、文化財登録制度が同年10月に導入されました。

登録文化財は、従来の文化財指定と異なり、建物を使っている状態で保護することを目的としたものです。このことにより、近代化遺産を保存する可能性は大きく広がりました。

### 重要文化財になった近代化遺産（一部記載）

件名	所在地	指定年	活用内容
門司港(旧門司駅)本屋	福岡県	昭和63年	当初の用途
仲村渠樋川	沖縄県	平成7年	当初の用途
三井石炭鉱業株式会社 三池炭鉱宮原坑施設	福岡県	平成10年	当初の用途
三井石炭鉱業株式会社 三池炭鉱旧万田坑施設	熊本県	平成10年	当初の用途
白水溜池堰堤水利施設	大分県	平成11年	当初の用途
三角旧港(三角西港)施設	熊本県	平成14年	当初の用途
旧筑後川橋梁 (筑後川昇開橋)	福岡県 佐賀県	平成15年	遊歩道
旧郡築新地甲号樋門	熊本県	平成16年	当初の用途

## 長崎港近代化遺産巡り



小菅修船場跡（国指定史跡）



三菱重工業長崎造船所ハンマーヘッド型起重機  
（国登録有形文化財）



三菱史料館



長崎台場跡 魚見岳台場跡（国指定史跡）



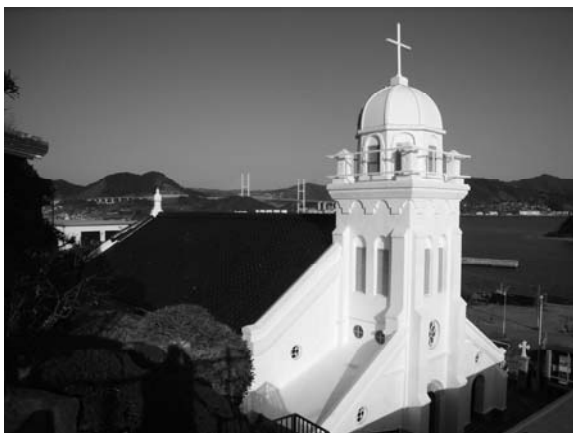
端島（軍艦島）



四郎ヶ島台場跡



ほっけいせいこうあと  
北溪井坑跡（市指定史跡）



神の島教会

## 馬込教会

### （国登録有形文化財）

幕末から明治初期にかけてのキリシタン弾圧は伊王島でも行われていましたが、信徒達は励まし、助け合って、信仰を守り通してきました。

馬込教会は、明治元年（1868）に仮聖堂が建てられ、明治23年（1890）、現在地に木造、漆喰塗りの白亜の教会堂が建立されました。

昭和に入って落雷や2度の台風で損壊したため、昭和6年（1931）3月に起工し、同年10月に竣工したのが現・教会堂で、地元の伊王島町船津の大工であった<sup>やまとかずよし</sup>大和和吉の施工です。

外観は、<sup>しんろうぶ</sup>身廊部（※1）の屋根を高くした重層屋根構成で、正面中央に鐘楼の八角形尖塔を、両脇に2段の小尖塔を立てて、賑やかな造形をなしています。デザインの力点は正面側の立面に集中しています。上層の側面には、円窓風の装飾が、下層の軒下や脇出入口上部には鋸歯状の装飾が施され、建物の四周を巡っています。

内部は身廊部と両側廊からなる<sup>さんろうしき</sup>三廊式の平面で、奥行き5間の会堂部の奥に、中央と両脇に祭壇がある内陣部（※2）を控えています。天井は板張8分割リブ・ヴォールト（※3）です。

早期の鉄筋コンクリート造の教会堂であり、地元の大工棟梁の工夫の跡が随所にうかがわれます。（※1）身廊部…教会堂建築において、中央の細長い広間の部分。身側廊の両側に側廊部がある。（※2）内陣部…祭壇部分の空間。（※3）リブ・ヴォールト…リブとは、

ヴォールトの力骨になる<sup>ろくさい</sup>肋材で、柱から柱にアーチ状に設けられ、荷重を柱に伝える役目がある。リブ・ヴォールトは、交差ヴォールトの稜線の下側に太いアーチを架け渡して、その弱点を補強したヴォールト。ヴォールトの重量は、補強アーチ（リブ）によって四隅の支持点へと伝えられる。



馬込教会

## 伊王島灯台旧吏員退息所

### (県指定有形文化財)

灯台職員用の宿舎である吏員退息所は、官舎とも呼ばれ、主屋は明治10年(1877)に完成しました。設計者は伊王島灯台と同じR・H・ブラントン、棟梁は大浦天主堂の建築に携わり、後に大明寺聖パウロ教会堂(現在は博物館明治村に移築)などを手がけた伊王島の大渡伊勢吉です。建物は明治初期の洋風建造物で、棧瓦葺寄棟造の平屋建て、7本の木柱の並ぶ吹放ちのベランダを有し、小屋組は木造のキングポストトラス、壁体は無筋コンクリート造で、無筋コンクリート造の建造物としては日本最古のものです。付属棟は明治34年(1901)完成。煉瓦造で、中には風呂と便所が設けられており、便所は灯台長用と一般職員用の区分があります。昭和46年(1971)の伊王島灯台無人化に伴い無人となり、半解体修理が行われたのち、現在は長崎市伊王島灯台記念館として公開・活用されています。

また、建物周辺は南方系の寄生性顕花植物キイレッツトリモチの群生地で、「伊王島キイレッツトリモチ群生地」として市指定天然記念物に指定されています。



伊王島灯台旧吏員退息所

### 伊王島キイレッツトリモチ群生地 (市指定天然記念物)

台湾、沖縄、九州南部から長崎県にかけて分布する南方系の寄生性顕花植物。トベラが主な宿主で、その根に寄生し、秋末に地上に花を現し、種子をつくります。



## 伊王島灯台公園

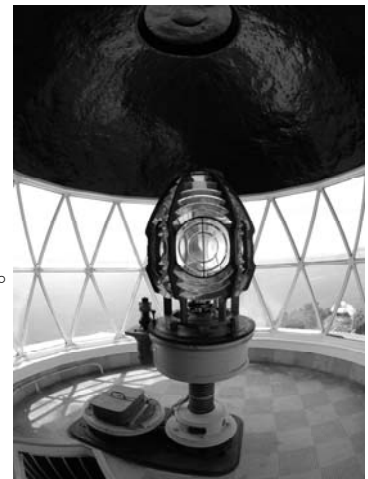
### (市指定名勝)

文久3年(1863)5月、長州藩が米・仏・蘭船を砲撃した「下関事件」の戦後処理として、慶応2年(1866)5月、改税約書に調印。この11条に、航路標識の整備が規定されています。これを受けて、イギリス公使ハリー・パークスは幕府に10ヶ所の燈台建設を要求しました。幕府はこれらの燈台の建設をお雇い外国人であるブラントン(Richard Henry Brunton)に依頼し、明治政府に引き継ぎました。ブラントンは明治元年(1868)8月、日本に到着し、解任される明治9年3月の任期中に、28基におよぶ灯台を完成させ、日本の燈台建設と維持管理の基礎を築きました。長崎では、安政5年(1858)日本が開港すると、上海・香港から貿易を求めて欧米の船舶が殺到しました。しかし、長崎港口には岩礁と小島が多く、居留外国人から長崎奉行に対し、強く燈台建設の要求がなされました。

長崎奉行は、T.グラバーにイギリスより鉄製灯台一式を取り寄せさせ、長崎製鉄所で加工し、明治元年6月、伊王島に日本最初の洋式灯台を建設。しかし同年12月、ブラントンが調査し、効率の悪いこの灯台を新しい形式の灯台に取り換えることにしました。明治2年(1869)6月に着工し、明治5年(1872)1月に完成しました。

明治初期の長崎は、小菅修船場、長崎製鉄所、高島炭鉱などの近代重工業の黎明期に当たり、船舶の石炭補給や修理の基地として近代化に向けて躍動してい

ました。長崎港口伊王島で灯光を放ってきた伊王島灯台は、日本の近代化遺産として極めて貴重な存在です。現在の伊王島灯台の頂部は、創建当時のものが使用されていると考えられます。



伊王島灯台内部